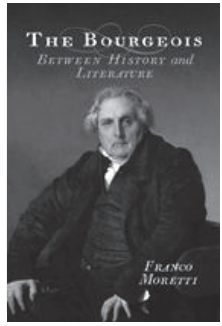
書　評



Franco Moretti, *The Bourgeois: Between History and Literature* (London: Verso, 2013)

富山　太佳夫

東京の洋書店で何か新刊本を買おうとするとき、私はどんな手順を踏むのを習慣にしているのだろうか……こんなこと、普通は考えはしない。それなのに、こんなことを改めて考えてしまうのは、眼の前にフランコ・モレッティの新しい本があって、この本を紹介するという仕事と向いあっているからだ。普通ならば本の内容を紹介し、これまでの同傾向の本との関係を説明し、そして評価すればすむことなのかもしれないが、この人物の場合にはとてもそうはいかないように思われる。その理由のひとつは単純なこと、同じ 2013 年に、*Distant Reading* という彼の別の論文集も刊行されているからだ。このタイトルは一体どう訳せばいいのだろうか。しかも 2005 年には、*Graphs, Maps, Trees: Abstract Models for a Literary History* という唖然とするようなタイトルの本まで彼は出しているのだ。ともかくこの 2 冊の本のタイトルを眼にしただけでも、彼が異様なところを幾つももつ研究者であるらしいことは容易に推測できるはずである。その彼が、『ブルジョワ、歴史と文学の間に』というあまりにも平凡かつ陳腐なタイトルをつけたこの本は、一体何を、どう論じているのだろうか。

しかし、その書評にストレートに向う前に、この研究者について多少なりとも説明しておく必要があるかもしれない。生まれたのは 1950 年。『グラフ、地図、木』の序文では、まずローベルト・ムージルの『特性のない男』が引用され、次の頁には、ガルヴァーリ・デッラ・ヴォルペの深い影響を受けて、「マルクス主義者として自己形成」したことが説明されている。確かに『ブルジョワ』の中でも、マルクス＝エンゲルスは無論のこと、ルカーチやアドルノ、ホルクハイマー、グラムシやファノンには繰返

し言及される。但し、フランスのマルクス主義に対する言及は殆どないに近く、アルチュセールの名前にしてもわずかに一回出てくるにすぎない。「＜現実にある矛盾を想像力によって解消するもの＞というのが、アルチュセールによる有名なイデオロギーの定式である」という一文のみである。しかもこの引用文はその出典さえ明示されていないのだ。これは恐らく偶然のことではないと思われる――このモレッティという研究者の中には、とりわけ構造主義以降のフランスの批評や思想に対する嫌悪感があることは間違いないようだ。その嫌悪感はアルチュセールに対してだけではなく、フーコーやデリダにも及んでいるようで、彼らの名前もこの『ブルジョワ』という本の中には登場することがない。そのような彼の眼がイェール学派、ディコンストラクション、ド・マンといった流派や人名に向けられることがないのは自明のことであるだろう。

彼のそのような全般的なスタンスを念頭において、『ブルジョワ、歴史と文学の間で』につながる彼の姿勢をとりあえず確認しておくことにしよう。

> 最近の文学理論はインスピレーションを求めてフランスとドイツの形而上学に眼を向けていたけれども、私がずっと考えていたのは、学ぶべきことは実は自然科学と社会科学の方にずっとたくさんあるということだった。この本はその信念のひとつの成果である。（『グラフ、地図、木』）

18 ～ 19 世紀のイギリス小説のジャンルの進化と多様化、19 世紀の幾つかの小説における農村の地理的な描き方の変化、そしてダーウィンの進化樹の考え方の文学への適用などを論じたこの小さな本には、本当に唖然としてしまうしかない。18 ～ 19 世紀のイギリス小説を 44 のジャンルに区別して、提示した図――それには、ただもう唖然としてしまうしかない。これまでの文学史的な区別とは一体何だったのだろうか。

もうひとつは、「1991 年の春、カルロ・ギンズブルクからヨーロッパ文学についてのエッセイを書いてほしいという依頼があった」と始まる『遠読』の中にある次のような一節である。

> 合衆国は精読 (close reading) の国である。……しかし精読には（新批評からディコンストラクションまでのすべてのかたちにおいて）問題があって、どうしてもきわめて少数のカノンに依拠してしまうということである。この点は今では眼に見えない、無意識の前提になってしまっているかもしれないが、それでも鋼鉄製のように強固なものになっており、本当に問題になるものはごく少数だと思ってしまえば、個々のテクストにのみやたらと力をそそいでしまうことになる。そうしなければ、意味をなさないであろう。そして、もしカノンの彼方にまで眼を向けたいということであれば（勿論、世界文学はそうするだろう。そうでなかったら、バカげたものになるだろう！）、精読ではダメだろう。精読の目的はそこにはない、その反対のことをするのが目的なのだから。……テクストをどう読むかはもう分かっている、これからは、どう読まないかを学ぶことにしよう。遠読 (distant reading) である。もう一度繰り返すならば、距離 (distance) を置くことこそ知の条件なのだ。それこそがテクストよりもずっと小さなもの、あるいはずっと大きなもの、つまり、修辞的技巧、テーマ、文彩――あるいはジャンルや体系にまとを絞ることを許してくれるのだ。

近距離からの精読 (close reading) と距離をおいての、つまり時間的、空間的な距離をおいての遠読 (distant reading) をこのようなスタイルで結びつける苦笑いしたくなる発想を、私はこれまで無意識のうちに体験することはあっても、明確に思考の対象とすることはなかったような気がする。

更に、同じ本、つまり『遠読』の中の同じ論文の中には次のような議論も含まれているのだ。

> 木は統一から多様性への移り変わりを描き出す。……波はその反対で、統一性が初めにあった多様性を飲み込んでしまうのを見守ることになる、ハリウッド映画が次々にマーケットを征服していくように（もしくは、英語が次々に他の言語を飲み込んでいくように）。木は地理的な非連続を必要とし……波は障壁を嫌い、地理的な連続性を支えとする（波の視点からすると、池こそが理想的な世界ということになる）。民族国家は木と枝にしがみつくのであり、市場がしがみつくのは波ということになる。……文化史は木と波でできているのだ――前進する農業の波がインド＝ヨーロッパ語族の木を支え、次にはそれが言語接触と文化接触の新しい波に押し流される。……そして世界文化はこの二つのメカニズムの間で揺れ動き、その産物は必然的に複合的なものとなる。……近代小説を考えてみよう。確かにそれはひとつの波ではあるが……その土地の伝統という分枝の中に流れ込み、

それらによって必ず意味ある変形をされていくのである。

ここには差異／差延とか、脱構築といった新造語はいっさい含まれていない。オリエンタリズムやポスト・コロニアリズムといった新造語も含まれていない。モレッティがめざしているのは、新造語を振り回してみずからの思考の新しさをアピールすることではなく、すでにそこにある素材を時代や地域を越えるかたちで再考してみるということだ。そのひとつの例として彼が選び出したのが「ブルジョワ」という存在であった。勿論彼はそれを経済問題の次元に限定することはないし、特定の研究領域に封じ込めてしまうこともない――そうしたさまざまの思いを込めて彼が選定したタイトルが『ブルジョワ、歴史と文学の間で』（2013 年）であったように思われる。

具体的にはどんな本なのだろうか。全体として 180 頁ほどのこの本の初めの 20 頁ほどを占めるのは「さまざまの概念と矛盾」と題された部分、いわゆる序論にあたる部分である。そこには財産や階級の問題や文化の問題への言及が出てくるし、ウェーバー、ホブズボーム、ペリー・アンダーソン、ピーター・ゲイ、サイモン・シャーマなどの名前がならび、「ブルジョワは失われてしまった」というトーマス・マンの 1932 年の台詞も引用されている。　あまりにもきらびやかなこの序論は、しかしながら読む者を失望させることはないはずだし、逆にそのあとの展開と構成に期待をもたせることになるだろう。

その次の第 I 章にあたる部分は、英文学の研究を生業とする者にとっては最も刺戟的な迫力をもつ部分かもしれない。対象となる作品は『ロビンソン・クルーソー』であるのだが、そこに、「18 世紀を通じて、一年間の労働日は 250 日～ 300 日だったと計算されているけれども、日曜日の地位がはっきりしないこの島では、その数はもっと多かったはずである」という経済史的な指摘が出てきたりする。更に、「この島でのロビンソンの重労働は、確かにこの本の中で最も目新しい部分である」という指摘に続いて、「資本家としての冒険者から、労働する主人へ」という展開になると、数多の『ロビンソン・クルーソー』論とは異なる視点が顔をのぞかせて来ることになるだろう。しかもそのあとは、「役に立つ」、「効率」、「安

らぎ」といった作品中の用語の分析が続くのだ（18 世紀の英語の文法史的な説明も含めて）。第Ⅱ章のキーワードのひとつは「真面目な」という言葉と概念――取りあげられるのは画家のフェルメール、小説家のスコット、ジョージ・エリオット、バルザック他、一体何人いるのだろうか。参照されるのはアウエルバッハ、ハンス・ローベルト・ヤウス他。第Ⅲ章は、アングルの裸体画等の分析から始まって、ジェントルマンの話、ヴィクトリア時代の形容詞の用法に展開する。しかし素材は決して英独仏の文学や文化に限定されてはいない。第Ⅳ章の最初の見出しは「バルザック、マチャード、お金」とされていて、少し進むと、「シチリア島のブルジョワ」という話題につながって行く。そしてユダヤ人問題も、或るコンテクストで浮上してきて、「彼の反ユダヤ主義は、ブルジョワがみずからに反発したということである」という指摘も飛び出すことになる。そして最後の章のタイトルは「イプセンと資本主義の精神」。

この本は、ブルジョワがさまざまの時代に、さまざまの土地で、さまざまのレベルで直面した状況の歴史的研究である。その破壊的な構築力に、私は感心してしまった。この本の裏表紙にはジョン・サザーランドの書評の中の一句が引用されている――「文学批評の偉大なる偶像破壊者」と。私も賛成する。